

ミキ先生との出会い

上 森 六 三

友人がミキ先生に差し上げた一通の手紙がきっかけとなり、昭和三十八年の夏に最初の出会いがありました。

当時、可部に下宿していた私は、学校の前を毎日バスで通勤していて、田園地帯の可部町にひととき目立つ、しゃれたデザインの鉄筋三階建の校舎があり、その右手には屋内体育館が建造中でした。

友達と二人で先生を訪ね、校長室へお伺いしました。先生は気軽に時間を裂いて、私達にいろんなお話をしてくださり、学校設置のねらい、教育方針、教育者としての生き甲斐など、お聞きし、感銘して帰りました。

二度目の訪問は、友人が教員になる決心をして郷里に帰り、母校で免許を取るため広島を去る時でした。その挨拶に伺った時も、お忙しい中を気持ちよく応対していただきました。（友人は昭和三十九年五月から一年かけて免許を取り、現在、京都の府立高校で教員をしている）

その後、私は一人で先生を訪問するようになり、先生の教育に対する情熱や生きざまに共感するものがありました。私は少しずつ教職への道に関心が傾いて行き、先生の元で仕事をしたいと思うようになりました。ある時は校長室で、先生大好物のソーメンを御馳走になりました。先生は人間味豊かな人柄で、人との出会いを大切に

する人でした。

このような出会いから昭和四十年四月、本学園に勤務することになりました。

赴任した年の研究授業では教師は生徒より知識・技術は高くなければ、教えることは出来ない。そのためには、教材研究を常にすること。ただ知識の切り売りに終わってはならない。一時間の中で「これだけは、何がなんでも分からせたい、分かってもらいたい」そんな情熱を持った授業をしなければいけないと言う助言をしていただいたことを、今でもよく覚えています。

また、夏には、創立以来、校訓実践という意味で二泊三日の宿泊研修があり、先生とともに仏通寺へ、また、勤労体験学習の一貫として日曜日直があり、各クラスが輪番で登校し、美化作業をしました。

先生は勤労を愛することを、実践を通して身体で教えてくださいました。

昭和四十年代の終わり、広報活動で賀茂郡や沼隈郡の中学校を、訪問したことがありました。七十才を過ぎた先生は、八時には中学校に着くように学校を出発し、一日に出来るだけ多く訪問するようなスケジュールをこなす元気ででした。

昭和四十六年、先生は高等学校長職は退かれましたが、教職員や生徒に、機会あるごとに「建学の精神」を話されました。時には学長室へ、お呼びがかかることもあり、高校教育のこと、生徒の進路に関すること、寮生のことなど、附属高校の将来を何時も案じての指導を受けました。公私にわたり先生のお世話になる機会が多く、大変ご縁が深かったと思っています。

先生はこれまで第一校舎の火災、移転問題、新校舎建設など、常に重荷を背負って苦勞されてきましたが、その

苦勞が実り、今日の武田学園があると思います。

先生の「建学の精神」がいろいろな面に浸透し、一本の太い幹が出来、大地にしっかりと根をおろしているからだと思います。後に残る者がその精神を受け継ぎ、より太い大樹に育てていかなければ済まないと思います。

私事になりますが、母と先生とは年齢が一つ違いで、先生には、何時も心にかけていただき、会うたびに母を気づかったださいました。また、母は下手な字で、先生に年賀状を差し上げ、何時の手紙にも「こどもがいつもお世話になります」と書いていたことを、先生は私に会う度に、そのことを話題にして「いくら年をとっても、親にとつてはこどもはこどもなので、大きなこどもよのお！」とおっしゃっていました。

先生と母とは「生き方・考え方」に似たところがあり、質素で骨惜しみせず、物を生かし、朝から晩までこまめによく働き、感謝・報恩の日を過ごし、お寺参りをよくする信仰の厚い人でした。その母も三年前に亡くなりました。私は十才で父を亡くし、十八才から親元を離れて生活をして来たこともあり、先生を広島の親と思ひ、随分、甘えと無理を言ってきた気がします。先生あつての私の現在があると思つています。

十一月二十日、先生の誕生日に果物を持って、お見舞いに伺つた時は、先生の顔色も大変よく、元気なお言葉もいただくことができました。先生は、「果物が好き、柿を食べたい、柿をむいて」と、看病しておられる定木昭子さんに言われたのを耳にしたのが、最後のお言葉になりました。

ミキ先生、長い間、ありがとうございます。安らかにお休みください。

謹んで、先生のご冥福をお祈りいたします。